The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「かぜ」とインフルエンザ
Author(s)	上嶋, 勲
Citation	makoto. 1973, 4, p. 2-2
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86263
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「かぜ」とインフルエンザ

大阪府衛生部環境保健課長
上嶋　勲

昔からかぜは万病のもとといわれていますが、これは、かぜの実態がなかなかわからず、また、いろいろな病気がかぜのベールをかぶって発生するところからこのようにいわれているようです。

また、ひとくちに、かぜといっても、寝冷えや過労からくるのもあれば、インフルエンザのように大流行をおこすのもあり、しかも、かぜの病原体ほど多くの種類がみつけられているのも複雑性を増す要素で、いろいろな型の症状があらわれるものです。

しかし、かぜの症状を簡単にまとめてみますと、くしゃみや鼻づまりそれに鼻汁をたらす症状にはじまり、せきやのどの痛みを訴える呼吸器症状と、頭痛や筋肉痛および全身のだるさ、それに発熱や食欲がふるわないというような全身症状がともなってくるものです。

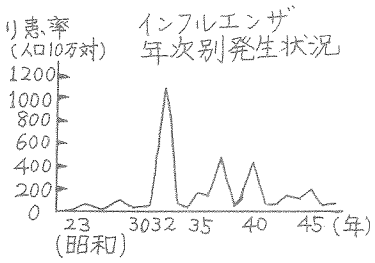
私たちが、日常一般によくかかるかぜは、「普通感冒」といわれ、前述の呼吸器症状が主としてあらわれ、時に全身症状を多少ともともなってくるものですが、「インフルエンザ」は、全身症状が最初から強くあらわれ重症な感じを与えるものです。しかし、最近は、普通感冒とよく似た症状をあらわすのもあり診断がなかなかくだされず、うがい水や鼻汁、それに血液の検査の結果わかるのもあります。

さて、かぜの種類と病原との関係ですが、インフルエンザはインフルエンザウィルスによっておこるわけでありますが、アデノウィルスやエコーウィルスなどによっても、臨床的にはインフルエンザと区別しにくい「インフルエンザ様疾患」をひきおこすことがあります。

また、普通感冒では、病原との関係はさらに複雑で、鼻炎などをおこすライノウィルスや扁桃腺炎や咽喉頭炎などをひきおこすアデノウィルス、その他、エコーウィルスやコクサッキーウィルスなどもこの病気の病原となりうることが、最近の研究で明らかとなってきています。

さて、かぜの代表的疾患であるインフルエンザは、インフルエンザウィルスによって人から人に飛沫感染しますが、このウィルスにA・B・Cの型があり、A型は、従来、A_1とA_2型に分類していましたが、WHOの国際命名委員会で、昨年から単にAとだけ表示し、ウィルスの免疫に関係するヘムアグルチニンのH、ノイラミニダーゼのNをウィルス名の後に記入することになったのです。

近年、インフルエンザの流行は、我が国においては、インフルエンザ年次別発生状況図にみられるように、昭和三十二年にアジアかぜが世界的に流行し、届出患者数が百万人近くかぞえられ、人口十万人に千人以上の率でありましたが、実際にはこの何倍もの人がかかったであろうと推測されています。



今年のインフルエンザは、四月より北海道や東北、関東地方に広まり、大阪にも影響を及ぼしたのでありますが、今年の二月まで流行していたB型のウィルスと抗原構造のちがった、B変異株による流行であることがわかりました。

従って、今年の秋以降のインフルエンザは、当然、従来の流行ウィルスのほかに、このB変異株による流行がおこるものと予想されています。

そのため、厚生省でも、インフルエンザ予防ワクチンをB変異株ウィルスにも効果を発揮するような新しいワクチンの製造を強く要請しており、十月中に八百万人分、十一月中に千二百万人分、間う合うよう目下製造中であります。

その製造株は、下欄に示すような四株であります。

A/東京/1/72(H_3N_2)
A/熊本/1/72(H_3N_2)
B/大阪/2/70
B/群馬/1/73

インフルエンザの予防については、流行期の前に、この新しい予防接種を受けることが最も良いのですが、このほか一般的な予防方法としては、老人や乳幼児が人ごみへ入ることは避け、また、流行時に多人数の集会を持ったり、デパートや混雑する車内や興行場への出入りを見合わせることです。

どうしても外出した場合は、外出後うがいを行なうと案外効果を発揮するものです。

不幸にして病気にかかったら、素人療法は禁物で、早くお医者さんにみてもらって適切な治療を受けることです。発病初期は、特に重要で、無理をしないで、安静と睡眠をよくとるように努め、完全に回復するまで出来れば医師の同意を得るまで仕事に復帰しないで治療に専念することです。これが、二次感染から身体を守る方法の一つです。

また、他人が近くにいるところでは、つばを吐いたり、くしゃみやせきを他人の顔に向けてしないことです。たんもたん壺に入れるよう配慮し、エチケットの上からも衛生上の面からも気をつけなければなりません。

＊　＊　＊